

まえばし街^{まちぢゅう}中リハビリテーション構想の戦略的拠点

*****広瀬川遊歩道沿いに「いきいき館」一号館を*****

齋藤 浩

「いきいき館」とはNPOのケアサービスが備わった集合住宅をいう。「自助、共助、公助」の理念のもとに、【入居者が資金を／自助】、【NPOがケアサービスを／共助】、【市が土地を／公助】をそれぞれ提供して運営される共同住宅である。このアイデアは1999年から本会が前橋市に提案してきたものである。

場所は旧勢多会館跡地がよい。街中にあることは入居者が孤独に陥ることを防ぐとともに中心商店街の活性化に大いに効果があり、現在の広瀬川の遊歩道、水と緑と詩の街の中心に位置し、入居者の誇りとなる。商店街に接するこの地点に新たなコミュニティの創造を意識した「いきいき館」一号館を建設したい。

建物は5階建。約30名のヤングオールドが生涯を安心してまっとうできる居室群を備え、行政、診療所、ケアマネ、訪問看護、ヘルパー、法律家、Vrなど医療・保健・福祉の諸サービスが集積する場とする。

■一階は医療、保健、NPOスタッフによる多機能サービスの空間。

- ①医療（クリニック）のフロア
- ②ケアマネジメント（訪問看護、ホームヘルパーSt）のフロア
- ③NPO 事務室（ボランティア）のフロア

※NPOの企画で「市民のくらし・健康なんでも相談室」等を常時開設する。

■二階は楽しい空間。食事、趣味と教養、スポーツ・レクリエーション機能。

- ①科学的で難しくない学習のフロア（音楽、文学、講話、学生らイベント）
- ②保健とスポーツのフロア（筋トレ、レク、リラックスの健康増進指導等）
- ③レストラン（地産地消、手作り、郷土食。料理講習会。抹茶とお菓子）

※NPOの企画で常時「食生活、文化教養、レクリエーション」等の講座を開設。

■二階の半分以上五階をバリアフリー構造、緊急連絡、見守り装置付き居室とする。

二種類、_____室 計 _____室を設ける。

Aタイプ

Bタイプ

■屋上には入浴室（居住者専用）と物置を置く。

■入居金 共益費 その他費用等

「いきいき館」は入居対象を高齢者のみに限らない。理念に賛同し規定を遵守し、希望すれば若者でも、単身者も家族も入居できるクリニックとNPOとが入居した終身利用権方式の集合住宅である。従って補助金を伴う介護施設ではない。

入居者の条件は以下の通り。

- ① 入居者は自助、共助、公助の理念に基づき、支えあって健康で文化的な生活をめざす。
- ② 入居者は本館を地域社会の一単位と考え、館の運営に参加する義務を負う。
- ③ 入居者は居室を清潔に保ち次世代に残す。
- ④ その他入居規定・・・

超高齢化時代のまちづくりは、その根幹に在宅ケアのサービス調整機能、すなわちケアマネジャーによる24時間切れ目のないケアサービスを適切に提供するケアマネジメント機能が安定的に維持される必要がある。いわゆる高齢者向けケア付き集合住宅は、これまで有料老人ホームとしえ主にリゾート地などを選んで建設されてきた。これら特定施設は行政の許認可条件がとりわけ厳しいが、その理由は、既設の事業の多くがハード面のみ偏重し、入居者の生活の質、老いの過程に対応したケア、地域との関係などソフト面が欠落し問題を起こしたことが原因であろう。特定の一業種がこうしたケアマネジメントのソフトを蓄積することはそもそも不可能である。

「いきいき館」一階に入居するNPO前橋・在宅ケアネットワークの会は、介護保険導入前から住民の助け合い活動を行い、高齢者の病院の送迎や入退院手続きなどの援助、退院後の往診や住宅、居室改造、話し相手派遣等、医療、介護のニーズに会員が連携して対応してきた経験を豊富に蓄積している。介護保険導入後は、独立したケアマネジャーを複数常勤させ、いずれの施設にも属さず利用者の立場に立ったケアプラン設計を行い、介護サービス全般にわたる情報集積と介護のコーディネート業務を行ってきた。

同様に入居するクリニックは、在宅医療のエキスパートの医師があたらなければならない。当然ながら入居者専用でなく地域全体を対象にすることが前提だが、まさに在宅での医療、介護を職種をこえて学んできた前橋・在宅ケアネットワークの会の出番なのである。

今日、医学、体育学の分野で「介護予防」の研究が長足に進み、リハビリ、スポーツ、レクリエーションを織り交ぜた親しみやすい運動療法が研究機関により開発されている。仲間友人との交流による積極的な行動療法により、加齢による様々な疾病がこうした施療により改善し、介護保険費用の削減にも貢献することが科学的に明らかになってきている。

介護予防による健康増進について保険財政への積極的効果を得るためには、市民の

広範な参加に保健活動が必要である。健康づくり管理、食事や運動トレーニングなど行政が行う保健活動を効果的に普及する拠点ともなるだろう。

介護保険導入から三年が経過し、財源的にもまた政策的にも施設ケアから在宅ケアへの転換が図られようとしている。こうした中で戦後の消費文化を牽引してきた団塊の世代が高齢化を迎える時代となっている。老いに備え、介護を必要とする前から“早めの住み替え”を選択する人は多いはずだ。

前橋中心街の空き地、遊休地をこの「自助、共助、公助」形式を活用して新たな住まい群として開発することはそれほど困難なことではないだろう。

「いきいき館」に新しい住民が集い、広瀬川や中心商店街に近く生活することで、新たな文化的影響もでてくるに違いない。

まず「いきいき館」一号館をNPOの拠点として中心商店街に接して建設しよう。広瀬川遊歩道と弁天通り商店街にいつも人が行き交い、賑わいを取り戻す第一歩としよう。「いきいき館」一号館では入居者はもとより日中は地域の主婦らが、夜は勤労者や若者が集まり、体力づくりや文化教養のセミナーを活発に行うだろう。

「いきいき館」は、自助、共助、公助の原則で新たなコミュニティの基盤となる戦略的住宅である。これを通じて中心街に賑わいを取り戻すには数十名では不足である。今後一定の期間内に、広瀬川沿いの遊歩道に比較的近い距離に、より多くの人が入居するための二号館、三号館が必要となる。われわれが「いきいき館構想」を掲げて5年が経過する。この間、市民各層から多様な形態で物件の紹介をうけたり、わが町にも綺麗で簡便なものがほしい、などの声も多く寄せられている。現在、厚労省では「小規模多機能型拠点」「介護予防センター」などを小中学校区の単位に設置する案を矢継ぎ早に打ち出している。高齢者が暮らしている自宅の生活圏から遠く移動することなく、最寄りに入居、住み替えが可能な、流動性の高い住居が全市的に必要とされるのである。

こうした政策方向と機会を見逃すことなく、機敏に行動する自助、共助、公助の協調体制が求められている。

全市的にとなれば幅広い利用者の費用負担の制約、限界もあり、古い建造物や空き店舗などのリフォームなど、多様な工夫と方法で魅力的な住宅を幅広く作り、提供する必要がある。そのためには、まちをあげた研究が必要なのである。